



Title: When should Home-visit nurses initiate end-of-life discussions for patients with Organ failure and family caregivers? A qualitative study

(訪問看護師は臓器不全患者と家族の終末期の話し合いをいつ始めるべきか？ 質的研究)

Authors: Kurumi Asaumi, Masataka Oki & Yoshie Murakami

(浅海くるみ (東京工科大講師)、大木正隆 (東京工科大教授)、村上好恵 (東邦大教授))

Journal: BMC Nursing volume 22, Article number: 258 (2023)

掲載年月: 2023 年 12 月

研究概要: 超高齢多死社会を迎えるわが国では、病院完結型医療から地域完結型医療に転換し、多くの国民が希望する在宅看取りの推進が喫緊の課題となります。この在宅看取りの推進のためには、訪問看護師が終末期の医療やケア・看取りの場を患者とその家族とともに検討する終末期の話し合い (End of life discussions) の実施が重要となります。その話し合いは遅すぎても早すぎても有効ではないため最適なタイミングで行う必要がありますが、疾患経過の予測が難しい臓器不全患者において、その終末期の話し合いのタイミングを特定することは困難です。

研究目的: 本研究では、在宅ケアの中心的役割を担う訪問看護師が、臓器不全患者と家族に対する End of life discussions (以下、EOL discussions) をいつ開始しているのかについて、明らかにしました。

研究成果: 2020 年 2 月から 2021 年 6 月にかけて、19 名の訪問看護師 (平均訪問看護経験年数: 6.7 年±5.9 年) インタビューを行い、Hsien and Shannon の質的内容アプローチを用いてデータを分析しました。分析の結果、訪問看護師が EOL discussions を開始する適切な時期を特定するタイミングは、3 時点でした。1 つめは、訪問看護師は、患者の病状の悪化に伴い、患者自身の死に対する発言・死期が近いことを示す臨床データを通じて「患者の症状が悪化したとき (symptomatic worsening)」に EOL discussions を実施していました。2 つめは、患者と家族の在宅療養に対する心構えや状況をどのように理解しているのかについて、多面的に捉えるなかで「患者と家族介護者の終末期に対する認識が不足している(lack of patients' and family caregivers' EOL awareness)」と思われた時期に、訪問看護師は EOL discussions の実施が必要であると判断していました。3 つめに、起床・移動・食事・着替え・入浴・排泄などの「患者の日常生活動作が低下したとき(decline in activities of daily living)」は、介護サービスや療養環境を調整する時期と一致するため、訪問看護師は EOL discussions の実施が必要であると判断していました。

考察および今後の課題: 本研究は、日本における臓器不全患者とその家族介護者に対する訪問看護師による EOL discussions のタイミングを検討した数少ない研究の一つです。国際的な臨床現場では、病気の経過を予測することが困難な臓器不全患者に対して、いつ EOL discussions を開始する必要があるかについてのコンセンサスがないため、今回の研究成果は、終末期ケアの基本である EOL discussions を開始するタイミングを検討するための指針になり得ると考えます。今後は、本研究の結果を基に、EOL discussions を開始するための最適なタイミングを評価するための尺度を開発することや、日本全国のビッグデータを収集し、機械学習による予測モデルを構築することで、患者さん一人ひとりのニーズに合った EOL discussions を開始する最適なタイミングを判断できるようになることが期待されます。